

令和4年度 新規指定・追加指定（国指定文化財）

記念物（史跡） しんぐうしもほんまちいせき 新宮下本町遺跡

- | | |
|----------|----------------------------------------|
| 1 種別（区分） | 記念物（史跡） |
| 2 名称（員数） | 新宮下本町遺跡（指定面積 5,796.37 m ² ） |
| 3 所有者 | 新宮市 |
| 4 所在の場所 | 新宮市下本町 |
| 5 指定年月日 | 令和4年11月10日 |
- （ 説 明 ）

新宮下本町遺跡は熊野川の河口から約2km、史跡新宮城跡の西麓の熊野川に面した自然堤防上に立地する。遺跡から熊野川の上流約600mの地点には、熊野三山の1つである熊野速玉大社が鎮座し、下流約500mの地点には、阿須賀（あすか）王子（阿須賀神社）があり、その間を熊野参詣道が通る。

新宮は太平洋航路における重要な港湾としても知られ、治承4年（1180）に始まる治承・寿永の内乱では、熊野と新宮を主要な拠点とする熊野海賊が源氏の勝利に貢献したことが知られる。また、熊野本宮大社文書の「熊野山日御供米碧海荘（ひみくまいおうみのしょう）配分状」（永仁3年（1295））には、熊野本宮大社の荘園であった上総国畔蒜荘（あひるのしょう）から新宮津への運賃と雑用についての記事が見られ、太平洋の海運を利用した貢納物の運搬が知られる。

また、文保元年（1317）には、武蔵国金沢称名寺（しょうみょうじ）金堂の修造用として熊野檜皮が送られ、貞和2年（1346）に京都法勝寺（ほっしょうじ）の塔造営に際して新宮問丸（といるまる）の鶴殿庄司（うどのしょうじ）が大柱3本を淀津に運んだことが確認されるなど、紀伊山地の木材の太平洋海運を利用した輸送が確認される。近世から近代にかけても熊野川河口には巨大な貯木場が築かれ、豊富な森林資源を集積し、そこから各地へと搬出しているとともに、熊野川の河川敷には往来する船のために「川原町」と呼ばれる簡易商店街が形成されていた。

このように、熊野川河口域に位置する新宮は、太平洋海運を利用した熊野山領からの年貢や森林資源など交易品の輸送において、古くから重要な拠点の1つであった。



遺跡の遠景（東南東から） *赤枠：今回指定範囲、黄枠：今後保護を要する範囲

新宮下本町遺跡は、平成27年(2015)に新宮市文化複合施設建設に伴う発掘調査で確認された。遺跡は、史跡新宮城跡の城下町にあたり、発掘調査では、近世の城下町に伴う街路や石垣を伴う有力家臣団の屋敷跡等が検出されるとともに、12世紀後葉から16世紀中頃にかけての港湾に深く関係すると考えられる遺跡が確認された。検出された遺構には、地下式倉庫や掘立柱建物、熊野川の河川敷に向かって下る石段通路、石垣、鍛冶炉などがある。なかでも地下式倉庫は、30棟以上検出され、その構造も多様である。また、出土遺物には山茶碗(やまじゃわん)、常滑焼、渥美焼、瀬戸焼、南伊勢系土鍋・土師器皿などの東海産のものと、備前焼、東播系(とうばんけい)須恵器、瓦器(がき)、播磨型土鍋、滑石製石鍋など畿内から瀬戸内産のものがあ、これらは、海上交通を介した広域な交流が行われていたことを示唆している。



川原へと下る石段通路と石垣



地下式倉庫

新宮市はこれらの成果を受けて、施設建設を抜本的に見直し、遺構が良好な状態で残る範囲を現状保存することとした。

12世紀後葉の成立以後、その規模や構造を何度か変えるが、港湾との関りが明確となるのは14世紀末頃である。この時期には、熊野川に面した自然堤防の斜面地を石垣を用いて段状に造成するとともに、それに直交して石段を伴う通路を設けている。また、段状の造成地からは地下式倉庫や鍛冶遺構が検出されている。

地下式倉庫には12世紀後半からみられる方形の竪穴に掘立柱構造をもつもの、13世紀末葉から現れる方形竪穴に土台構造をもつもの、14世紀末葉に現れる方形竪穴に石積構造をもつものがあるが、15世紀前葉には、これらの倉庫群が川に並行して複数建ち並ぶようになる。

また、この時期には出土遺物も多様化し、瀬戸焼の搬入量の増加に加え南伊勢系の土師器皿の搬入、播磨型土鍋の搬入が認められるようになるなど、交易範囲の拡大が想定される。この頃は、熊野速玉大社の上位の社僧である上綱(じょうこう)のひとりである宮崎氏が衆徒等を統制し、支配を行っていた時期に相当し、これらの施設の整備も宮崎氏との関係が想定される。

16世紀に入ると衰退へと向かうが、この時期、この地の実質的な支配者が宮崎氏から堀内氏に代わった時期に相当するので、それに伴い港湾としての機能も別の場所に移された可能性がある。

このように、新宮下本町遺跡は中世以降、太平洋の海運の重要な拠点であった新宮における港湾や海を介した交流の実態を知る上で重要なだけでなく、中世の海上交通と宗教勢力との関係や、平安時代末頃以降から全国へ信仰が拡大する熊野三山の経済基盤等について考える上でも重要である。

